

第2回白壁賞は馬場保昌氏ら、 第21回村上記念「胃と腸」賞は 松田圭二氏らに

第2回白壁賞は、馬場保昌氏(癌研病院検診センター)、他7名による「X線の胃小区像からみた背景粘膜の質的診断」(胃と腸 30: 1315-1324)に贈られ、9月18日(水)、パシフィコ横浜で行われた「胃と腸」大会席上において、その贈呈式が行われた。

まず、司会の西元寺克禮氏(北里大学内科)から受賞者が発表され、早期胃癌研究会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)から受賞者代表の馬場氏に賞状と賞牌が、医学書院からは副賞の賞金が贈られた。

八尾氏は、“白壁先生は七十数歳になられても、いつまでも若々しく、いつも早期胃癌研究会で一番前の席に座って、真剣に質問をされていた。そのような白壁先生のご偉業を記念してつくられたのが白壁賞であり、その賞に、正にふさわしい論文である”と感想と祝辞を述べた。

次に選考委員を代表して、伊藤誠氏(名古屋市立大学第1内科)は、“今回、選考対象として「胃と腸」第30巻に掲載の全論文、ならびに他誌に掲載された論文からの推薦も公募したが、結果的に他誌掲載論文の応募はなく、「胃と腸」に掲載された論文の中から6本に絞り、「胃と腸」編集委員による投票を経て、圧倒的多数で今回の受賞論文が決定した。本論文は馬場先生が癌研で二十数年間、研鑽を積み、情熱を燃やし続けられてきた



白壁賞受賞者代表の馬場保昌氏



八尾氏から賞牌を受ける馬場氏



◀選考過程を述べる
伊藤誠氏



▲満員となった会場

X線診断学を、極めてクリアカットな写真と解説でもって論文化されたものであり、長年、親交してきた私としても、わがことのようにうれしい”と選考過程と祝辞を述べた。

馬場氏は“最近ではバリウム診断は内視鏡に押されて、なかなか若い先生方はやってくれないが、新しい機械と造影剤を使い、撮影方法に工夫を凝らせば、小さな模様像から組織像を思い浮かべることができる。今後も研究を続けて、バリウム診断のすばらしさを訴えていきたい”と抱負を述べ、感謝の意を表し、満場の拍手を浴びた。

会場では引き続き、第21回村上記念「胃と腸」賞の贈呈式が行われ、松田圭二氏(新潟大学第1病理)、他5名の論文、「新しい視点からみた胃筋原性腫瘍の病理—



村上記念「胃と腸」賞受賞者代表の松田圭二氏

Ki-67 染色による良・悪性の鑑別，分化度と筋原性形質発現および肉腫の発生母地・増悪化」(胃と腸 30: 1109-1124)が，受賞した。

八尾氏は，“村上忠重先生は，白壁彦夫先生，崎田隆夫先生らと「胃と腸」の発刊にあたりご尽力をいただいた先生であり，悪性サイクル，潰瘍のUI分類などの臨床病理の草分けとしてご活躍された方であり，その先生を記念した賞に，誠にふさわしい論文である。松田先生はまだ若いので，これから何度でもこういった賞を受賞されるように頑張ってもらいたい”と述べ，賞状と賞牌を手渡した。続いて，医学書院社長・金原優から副賞の賞金が



八尾氏から賞状と賞牌を受ける松田氏

贈られた。

伊藤氏は選考過程ならびに祝辞として，“本論文は，Ki-67 にモノクローナル抗体の染色で，胃の筋原性腫瘍の良・悪性の定量化を試みたもので，非常に良い成績を出している。また同じ手法で，gastric stromal tumor のほとんどが，幼若細胞もしくは悪性細胞から成っているという新しい提言もなしている。新進気鋭の病理学者である松田先生はもちろん，恩師であり，日頃から多くの優秀な論文で多大な貢献をなされている渡辺英伸先生もさぞ，お慶びでしょう”と述べた。

受賞者を代表して，松田氏は，“今回の研究を行うに当たっては渡辺教授はじめ多くの先生，教室の皆様にご協力いただいた。この賞は新潟大学第1病理に与えられたものであり，皆で喜びを分かち合いたい。第1病理は大変明るく，活気があり，研究設備も整っているので，皆様のご来訪を教室員一同お待ちしております”と喜びと感謝の念を表し，教室員の募集もして，会場から喝采を浴び，盛会裡に式は終了した。